

# オブジェクト指向と ゲームプログラミング

## DirectX Graphics 2D編 - 第8回 ピクセルフォーマット

### ピクセルフォーマット

画像処理においてもっとも理解しにくいと言われているのがピクセルフォーマットです。しかし、これが理解できれば、テクスチャやサーフェスのピクセルに直接アクセスして書き換えることが可能になり、高度な画像効果を作成することができます。

DirectX Graphicsのピクセルは、RGBと呼ばれる光の三原色、赤(Red)、緑(Green)、青(Blue)とアルファチャンネル(Alpha Channel)を調合して作られます。ピクセルフォーマットとは、サーフェスの1ピクセルを構成するビット数と、そのビットの並びかたのことです。同じ色でも、ピクセルフォーマットにより表現の方法が変わります。

#### 16ビットのピクセルフォーマット

R 5 : G 6 : B 5 (D3DFMT\_R5G6B5)

16ビットを赤5ビット、緑6ビット、青5ビットと割り当てたピクセルフォーマットです。人間の目は、緑がもっとも敏感に識別できると言われているので、緑に1ビット多く割り当てています。65,535色扱うことができます。

R	R	R	R	R	G	G	G	G	G	G	B	B	B	B	B
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

赤 5 ビット 緑 6 ビット 青 5 ビット

X 1 : R 5 : G 5 : B 5 (D3DFMT\_X1R5G5B5)

1ピクセルあたり16ビット割り当てられますが、3で割った余りの1ビットは使用せず、RGB各成分に5ビットずつ割り当てたピクセルフォーマットです。32,678色扱うことができます。

X	R	R	R	R	R	G	G	G	G	G	B	B	B	B	B
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

赤 5 ビット 緑 5 ビット 青 5 ビット

A 1 : R 5 : G 5 : B 5 (D3DFMT\_A1R5G5B5)

RGB各成分に5ビット、アルファチャンネルに1ビット割り当てたピクセルフォーマットです。

A	R	R	R	R	R	G	G	G	G	G	B	B	B	B	B
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

赤 5 ビット 緑 5 ビット 青 5 ビット

A 4 : R 4 : G 4 : B 4 (D3DFMT\_X4R4G4B4)

RGBおよびアルファチャンネルの各成分に4ビット割り当てたピクセルフォーマットです。4,096色扱うことができます。

A	A	A	A	R	R	R	R	G	G	G	G	B	B	B	B
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

アルファ 4 ビット 赤 4 ビット 緑 4 ビット 青 4 ビット

#### 24ビットのピクセルフォーマット

R 8 : G 8 : B 8 (D3DFMT\_R8G8B8)

1ピクセルは、赤8ビット、緑8ビット、青8ビットの計24ビットで表現されます。16,777,216色扱うことができます。

R	R	R	R	R	R	R	R	R	G	G	G	G	G	G	G	B	B	B	B	B	B
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

赤 8 ビット 緑 8 ビット 青 8 ビット

#### 32ビットのピクセルフォーマット

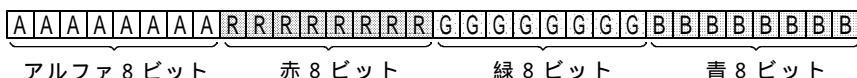
X 8 : R 8 : G 8 : B 8 (D3DFMT\_X8R8G8B8)

1ピクセルは、ダミー8ビット、赤8ビット、緑8ビット、青8ビットの計32ビットで表現されます。本質はD3DFMT\_R8G8B8と同じなので、色数は増えていません。にもかかわらずの多くメモリを消費しているのは、32ビットというデータがシステムにとって相性がよいため、演算や転送効率に高いパフォーマンスが望めるためです。RGBの並びが逆順のD3DFMT\_X8B8G8R8というフォーマットもあります。



A 8 : R 8 : G 8 : B 8 (D3DFMT\_A8R8G8B8)

RGBおよびアルファチャンネルの各成分に 8 ビット割り当てたピクセルフォーマットです。RGBの並びが逆順のD3DFMT\_A8B8G8R8というフォーマットもあります。



A 2 : R 10 : G 10 : B 10 (D3DFMT\_A10R10G10B10)

RGB各成分に 10 ビット、アルファチャンネルに 2 ビット割り当てたピクセルフォーマットです。1, 073, 741, 824(約 10 億)色表現することができます。RGBの並びが逆順のD3DFMT\_A2B10G10R10というフォーマットもあります。



DirectX Graphicsでは、これらのフォーマットのほか、64ビットのピクセルフォーマットやピクセルの色値を浮動小数点で扱う浮動小数点数フォーマットもサポートしています。

## D3DCOLORマクロ

RGBとアルファチャンネルを調合して色を作成するために、DirectX GraphicsではD3DCOLORで始まるD3DCOLOR\_RGBA、D3DCOLOR\_XRGB、D3DCOLOR\_ARGBマクロを提供しています。これらのマクロは、赤、緑、青の輝度と透明度をそれぞれ0~255の256段階で指定すると、その色を表すD3DCOLOR型の32ビット値(フォーマットはD3DFMT\_A8R8G8B8)を返します。

たとえば、ピンク色(赤:255、緑:128、青:192、アルファ:96)を作成するには、

```
D3DCOLOR color = D3DCOLOR_RGBA(255, 128, 192, 96);
```

とします。返された値は、DirectX Graphicsのメソッドや関数を用いて描画するときに使用します。デバイスコンテキストでは使用できません。テクスチャやサーフェスにアクセスしてピクセルを直接書き換える場合は、フォーマットが同一の場合を除き、この値をそのまま使用することはできません。

## テクスチャとサーフェスへのアクセス

サーフェスメモリへアクセスしてピクセルデータを書き換えることができます。サーフェスメモリへのアクセスするには、IDirect3DSurface9::LockRectメソッドを呼び出し、サーフェスをロックしてポインタを取得します。

サーフェスメモリへのアクセスが終了した場合は、IDirect3DSurface9::UnlockRectメソッドを呼び出してロックを解除します。ロックを解除しないと、描画できません。

```
// サーフェスメモリへのポインタ取得(pD3DSurfaceは初期化済みのサーフェスインタフェース)
D3DLOCKED_RECT lock;
pD3DSurface->Lock(&lock, NULL, 0);
```

```
// lock.pBitsにポインタが返されるので、これを介してサーフェスメモリにアクセスする
```

```
pD3DSurface->UnlockRect(); // ロック解除
```

テクスチャでは、Direct3DTexture9::LockRectメソッドとIDirect3DTexture9::UnlockRectメソッドを提供しているので、サーフェスを取得しなくてもイメージへアクセスできます。

```
// テクスチャイメージへのポインタ取得(pD3DTextureは初期化済みのテクスチャインタフェース)
pD3DTexture->Lock(0, &lock, NULL, 0);
```

```
// lock.pBitsにポインタが返されるので、これを介してテクスチャイメージにアクセスする
```

```
pD3DTexture->UnlockRect(); // ロック解除
```

## 課 題

バックバッファクラスとスプライトクラスに、サーフェス(テクスチャ)の幅や高さといった情報を取得する機能と、イメージを格納しているメモリへのポインタを取得する機能を追加しましょう。

(1)バックバッファクラスに、サーフェスの幅や高さといった情報を取得するGetDesc関数を作成します。以下のプログラムを完成させ、適切な場所に追加しましょう。また、プロトタイプも忘れずに作成しましょう。

```
/*~~~~~*/
/*          サーフェス記述取得          */
/*~~~~~*/
D3DSURFACE_DESC CBackBuffer::GetDesc()
{
    // テクスチャ記述取得
    D3DSURFACE_DESC desc;
    m_pD3DSurface->GetDesc(&desc);

    return desc;
}
```

(2)スプライトクラスに、スプライトの幅や高さといった情報を取得するGetDesc関数を作成します。以下のプロトタイプをISpriteクラス定義の適切な場所に追加しましょう。

```
virtual D3DSURFACE_DESC GetDesc() = 0;
```

(3)CSpriteクラスとCNullSpriteクラスにGetDesc関数を追加します。この関数のプロトタイプを(2)をもとに作成し、適切な場所に追加しましょう。

(4)CSpriteクラスにGetDesc関数を実装します。以下のプログラムをソースファイルに追加しましょう。

```
/*~~~~~*/
/*          スプライト記述取得          */
/*~~~~~*/
D3DSURFACE_DESC CSprite::GetDesc()
{
    // テクスチャ記述取得
    D3DSURFACE_DESC desc;
    m_pD3DTexture->GetLevelDesc(0, &desc);

    return desc;
}
```

(5)CNullSpriteクラスにGetDesc関数を実装します。以下のプログラムをソースファイルに追加しましょう。

```
/*~~~~~*/
/*          スプライト記述取得          */
/*~~~~~*/
D3DSURFACE_DESC CNullSprite::GetDesc()
{
    D3DSURFACE_DESC desc;
    ::ZeroMemory(&desc, sizeof(desc));

    return desc;
}
```

(6)各ヘッダファイルで必要となる情報をまとめたヘッダファイルを作成します。ヘッダファイル(DXGTypes.h)を以下のように作成しましょう。

- DXGTypes.h -

```
/*
=====
                          オブジェクト指向ゲームプログラミング
Programmed by Hibikino software. Copyright (c) 2005 Hibikino software. All rights reserved.
=====
【対象OS】
  Microsoft Windows2000/XP
【コンパイラ】
  Microsoft Visual C++ 2005
【プログラム】
  DXGTypes.h
  DirectX Graphics型定義
【履歴】
  * Version    1.00    2005/04/dd  hh:mm:ss
=====
*/

#pragma once

/*****
/*
                          インクルードファイル
*****/
#include <d3dx9.h>

/*****
/*
                          型定義
*****/
typedef D3DXVECTOR3  DXVEC3;

/*****
/*
                          構造体定義
*****/
// ロック詳細記述
struct DXGLOCKED_DESC {
  D3DFORMAT  Format;    // フォーマット
  UINT       Width;    // 幅
  UINT       Height;   // 高さ
  int        Pitch;    // ピッチ
  void*      pBits;    // イメージへのポインタ
};
```

DXGLOCKED\_DESC構造体は、BackBuffer.hppとSprite.hppで必要となります。このような場合、どちらかのヘッダファイルで定義してしまうと、ヘッダ間の依存関係が複雑になり、エラーが多発する場合があります。両方のヘッダで定義すると、多重定義エラーになります。

これらの問題を解決するために、共通部分を抽出し、上記のようなヘッダファイルを作成します。

(7)バックバッファクラスに、サーフェスをロックしてイメージへのポインタを取得する機能とロックを解除する機能を追加します。以下のプロトタイプを適切な場所に追加しましょう。

```
DXGLOCKED_DESC Lock();
void Unlock();
```

DXGLOCKED\_DESC構造体はDXGTypes.hで定義されていることに注意しましょう。

(8) バックバッファクラスに、サーフェスをロックしてイメージへのポインタを取得するLock関数を実装します。以下のプログラムを完成させ、適切な場所に追加しましょう。

```
/*
 *
 *
 */
DXGLOCKED_DESC CBackBuffer::Lock()
{
    // サーフェス記述取得
    D3DSURFACE_DESC surface;
    m_pD3DSurface->?????(&surface);

    // ロック
    D3DLOCKED_RECT lock;
    m_pD3DSurface->?????(&lock, NULL, 0);

    // ロック記述設定
    DXGLOCKED_DESC desc;
    desc.Format = surface.?????;
    desc.Width = surface.?????;
    desc.Height = surface.?????;
    desc.Pitch = lock .?????;
    desc.pBits = lock .?????;

    return desc;
}
```

サーフェスをロックしたときに得られる情報は、サーフェスのピッチ(次の行までのバイト数)とサーフェスメモリへのポインタだけで、幅や高さといった情報は取得できません。そこで、ロック前にサーフェス記述で取得し、ロック情報と合わせてDXGLOCKED\_DESC構造体にまとめて返すようにしています。

(9) バックバッファクラスに、ロックを解除するUnlock関数を実装します。以下のプログラムを完成させ、適切な場所に追加しましょう。

```
/*
 *
 *
 */
void CBackBuffer::Unlock()
{
    m_pD3DSurface->?????();
}
```

(10) バックバッファクラスに、テクスチャをロックしてイメージへのポインタを取得するLock関数とロックを解除するUnlock関数を追加します。以下のプロトタイプをISpriteクラス定義の適切な場所に追加しましょう。

```
virtual DXGLOCKED_DESC Lock() = 0;
virtual void Unlock() = 0;
```

(11) CSpriteクラスに、Lock関数とUnlock関数を追加します。この関数のプロトタイプを(10)をもとに作成し、適切な場所に追加しましょう。

(12) CSpriteクラスに、Lock関数とUnlock関数を実装します。以下のプログラムを完成させ、ソースファイルに追加しましょう。

```
/*
 *
 *
 */
DXGLOCKED_DESC CSprite::Lock()
{
    // テクスチャ記述取得
    D3DSURFACE_DESC surface;
    m_pD3DTexture->??????.(0, &surface);

    // ロック
    D3DLOCKED_RECT lock;
    m_pD3DTexture->??????.(0, &lock, NULL, 0);
}
```

```

// スプライト情報設定
DXGLOCKED_DESC desc;
desc.Format = surface.?????;
desc.Width = surface.?????;
desc.Height = surface.?????;
desc.Pitch = lock .?????;
desc.pBits = lock .?????;

return desc;
}

/*****
/*                                ロック解除                                */
*****/
void CSprite::Unlock()
{
    m_pD3DTexture->????????(0);
}

```

(11)CNullSpriteクラスに、Lock関数とUnlock関数を追加します。この関数のプロトタイプを(10)をもとに作成し、適切な場所に追加しましょう。

(12)CNullSpriteクラスに、Lock関数とUnlock関数を実装します。以下のプログラムをソースファイルに追加しましょう。

```

/*****
/*                                ロック                                */
*****/
DXGLOCKED_DESC CNullSprite::Lock()
{
    DXGLOCKED_DESC desc;
    ::ZeroMemory(&desc, sizeof(desc));

    return desc;
}

/*****
/*                                ロック解除                                */
*****/
void CNullSprite::Unlock()
{
}

```